
蜘蛛

きみよし藪太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蜘蛛

【Nコード】

N8642S

【作者名】

きみよし藪太

【あらすじ】

蝶姉様は血のつながらない蜘蛛を弟のように可愛がる。
ふたりは死人。
娼館の女たちも皆、他のいきものと掛け合わせた死人だ。
今日も蝶姉様の上客、安坂がやってくる。

蜘蛛・1（前書き）

続きものです。

蜘蛛・1

鰯の刺身が食べたいと言われて遣いに出たので、今日は特別な客が来ることを蜘蛛は察していた。蝶は魚など何が楽しくて食べなくてはならないのだといつも言っているくせに、安坂が来る日だけは嬉しそうに彼の好きなその食べ物を用意させる。色が黒く、細いの
に肩幅のがっちりした安坂はまだ若いのに蝶の上客で、目鼻立ちが
すっきりとして左右対称の丁寧な顔をしているせいなのかその爽や
かな性格のせいなのか、人好きのするなかなかのいい男だった。あ
の少し骨張った手が、と蜘蛛は思う。持ち方のおかしな箸使いをし
ながらも、楽しそうに鰯の刺身を食うのを見るのは、見ているこち
らも愉快的気分になる。酒もよく飲むし他の客もたくさん連れてく
る、そうして彼らは最初おっかなびつくりであつてもそれなりに見
目美しい猫や狐や犬などを抱いて帰るのだから、結局金になる。店
にとつてはあれほどの上客も少ないだろう、などと考え事をしてい
たので、つい魚屋の裏口を通り過ぎてしまひそうになった。あわて
て引き返し、その戸口をそつと叩く。一旦ふつくらとした人の良さ
そうな女が顔を出したが、すぐに眉を寄せて引つ込み、しばらくし
てから赤ら顔の親父が笑みを浮かべて出てきた。

「おう蜘蛛、今日は何の遣いだ」

「……今日は鰯の刺身を、」

「ああ、ちよつと待つてろ、今すぐ包んで持つてくるから」

先程の女の態度に今でも傷付いてしまふ自分を蜘蛛は恥じる。

魚屋の親父は確かに金の為に愛想がいいのかもしれないが、それ
も前のようにあからさまに気味悪そうな顔をして追い返すことはな
くなつたではないか、と言ひ訳を並べて納得しようとする。

蜘蛛は死人だ。

若くして死んだ男なのらしい、年の頃十三、四の姿をしており、
そばかすの散つた白い顔に細い目、そしてひよろりと長い手脚を持

っている。身寄りのない死人を引き取るのか、それともどこからか盗んでくるのか家族に売られるのか、蜘蛛のいる娼館ではそういうものに動物を掛け合わせた生き返りの女ばかりがいる。猫に狐に犬に狸、鳥に鼠などほぼ人間と変わりがないが、尻尾があったり羽があったりする女達だ。男はすべて見世物小屋へ売られるらしいが、たまたま生き返りの中でも一番美しかった蝶が蜘蛛を弟のように可愛がっており、この子はあたしの付き人だから、と手元に置いてくれているので見世物にならずに済んでいる。自分達を何の目的で誰が作っているのかは知らないけれど、とにかく一度死んでしまったものを他の命と掛け合わせることによって再び生かされているようで、しかしその仕組みは蜘蛛もよく分からない。覚えているのは生前の名前くらいのもので、それも誰からか戯れに教え込まれたただけだと言われればたちまち自信を失くす。

「ほら持つて行きな、悪くなっちまわないように今夜の内には食っちまうように言っておけよ」

しばらく待っているとまた裏口の戸が開き、魚屋の親父が白い包みを手渡してくれた。蜘蛛は礼を言つて深々と頭を下げ、金を払つて踵を返す。聞いちまわなきゃそらの子供と同じなんだけだと親父が言つのは、彼の耳には届かなかった。

「嫌だ嫌だ、気味が悪いよ塩でも撒くと良いさ、あんたもまた物好きな人だね、あんな化け物小屋の奴等に魚を売つてやるなんて」

蜘蛛に眉を寄せて見せた女がひよっこり顔を出し、大袈裟に顔を顰めた。

「金払つてくれりゃ誰だつて客さ、木の葉や貝の金だつてんならお断りだな。それに蜘蛛も可哀想な子じゃねえか、一体いつまで年取らないあのまんまで生きてんだか」

「だから化け物つて言うんじゃないの」

「人を捕つて食うでもないし、害がなけりゃいいとは思うがね」

死人が出歩いているつてのが気味悪いんじゃないの、と女は怒鳴りつけて奥へ引込んだが、親父は蜘蛛が行ってしまった裏道を

なんの気なしに眺めながら、それでも金払う誰かの道楽で生き返ってんなら死人も可哀想じゃねえか、とだけ呟いた。

「蜘蛛、蜘蛛はまだ帰ってこないの、」

鈴を振るような声がする。昼間は静かな娼館へその声は溶けてしまいそうに空気を震わせた。今戻りました、と勝手口で短く叫び、通りかかった狐にくすりと笑われる。

「あんた、またこんな所で大声出すと、蝶の奴に無粋だって叱られるわよ」

鼻のきゅつと尖った女はふさふさとそれは見事な尻尾を持っている。細いつり　目をますます細くし、不意に手を伸ばして蜘蛛のざらざらした黒髪をぐいっとなでた。

「わ、」

「あんた可愛いねえ、食っちゃいたいくらいだよ」

「……狐姉様、蜘蛛をからかわないでください」

小さな声でようやく言うと、狐はますます目を糸にする。

「今日の遣いは何だったんだい」

「安坂様がいらっしゃるので、鰯の刺身を買っようと」

「また鰯！　あの男は金を持っているくせに貧乏だったらしいものが好きだよ」

蝶姉様に呼ばれていますので、とそそくさと脇を通り過ぎようとしたけれど、狐の尻尾にしばし邪魔をされ、玩具にされてからようやく解放された。蜘蛛は自分がかいかいの対象であることは重々承知だが、それも仲間としての異性が他に居ないからなのだということも知っているの、されるがままになってしまう。一度死んでいる身なのだ、所帯を持つことどころか誰かを好いてしまうことも御法度とされている彼女らを、どうして邪険にできるだろう。

「蝶の付き人なんてやめちまって、狐のものになんなよう」

ありがとうございます、と俯きながらも笑って見せると、あらま可愛い顔をして、と相手も嬉しそうに笑った。蜘蛛は可愛がられて

いるのだ、基本的にはこの娼館で。いいものやろう、と豆の入った大福をくれて、狐は二階へ上がって行く。それを見届けてから、蜘蛛は慌てて、けれども足音を立てないように蝶の部屋へ行った。

「戻りました、蜘蛛です」

「お入り、」

襖を開け、覗いた蜘蛛の目に飛び込んできたのは、色とりどりの帯の川。虹の配色と同じ、紫に青に藍、緑、黄色、赤に橙、それから金も銀も、溢れる色彩に蜘蛛は眩暈すら覚える。

「蝶姉様、何を、」

「安坂はどの帯が好きだと思ukai」

「今夜の着物ですか」

透き通るような白い肌を持つ蝶は、その名の通り美しい羽を背に隠している。小さな顔に大きな瞳は濡れて輝き、くちづけを受ける為だけに存在しているかのようなふつくらとした唇は何人も男を知ってもまだ純粹無垢な印象を与える。

「帯から決めるのですか、着物ではなく」

「着物で迷ったので帯からにしたのだ、けれどもそうしたら余計に迷う」

悪戯をしている子供のように目を細め、蝶はその形良い唇を持ち上げて微笑む。

「蜘蛛は……蜘蛛は蝶姉様にはどんな着物も似合うと、そして似合わないと思いますが」

「似合うけれど似合わないとは、」

「下手な着物よりも蝶姉様の方が美しいですよ」

「お口が上手くなったこと、嫌だわ蜘蛛もそうしてあたしをからかうのねえ」

そんな、と慌てて首を振ったところがまた可愛らしいと蝶は笑い、その小さな手で蜘蛛を手招く。帯を踏まぬように近付き、蜘蛛はひらりと誘っていた蝶の手に自分の頬を押し当てた。

「この可愛い口があたしをからかうのね、」

小さな掌はそのまま蜘蛛の顔を覆い、蝶の方へと引き寄せる。白粉の香りは甘いのだといつもその時に思う。唇を重ねたことはないのだけれど、見詰め合うとそれ以上に空気は濃くなり互いの間に何かしらの感情がやり取りされている気になるのだ。

「あたしに『似合う』だけの着物を安坂に買ってもらうことに……あら、それは、」

ふと蝶の手が蜘蛛の胸元に伸びた。ぎくりとして身体を硬くするも、目的は蜘蛛自体ではなくそこにあった小さな包みだということがすぐに知れる。

「これは、」

「さつき、狐姉様に頂いた大福で、」

あ、と思う間もなく、その包みは蝶の小さな手で投げつけられた。驚いた蜘蛛が目で追うも、既に包みは壁に叩き付けられてひしゃげ、中身の餡まで飛び出している。余程の力だったのだろう、この小さな身体にどうしてそんな力がと蜘蛛は不思議に思っていた次の瞬間にもう蝶に思いきりの力で抱き締められていた。蜘蛛は驚いてもがいたけれども少しもその腕からは抜け出せない。

「あたしの他から誘惑をされては駄目よ」

「誘惑、など、」

「蜘蛛は可愛いから駄目よ、誰にでも好かれてしまいわ、だから駄目よ、蝶から離れちゃ駄目なのよ」

大福を貰ったくらいで、と正直思わないでもなかったが、蜘蛛はそれ以上何も言わずに蝶がしたいがままにさせておいた。帯を踏まないようにと気を足元に集中させているのだけれど、蝶の方はまったくお構いなしだ。

「蜘蛛は蝶の可愛い弟よ、絶対誰にも誘惑なんかされちゃあいけないのよ」

ぎゅうぎゅうと力を込める白い腕の、その隙間からつい笑い声を上げてしまうと、蝶は驚いたように蜘蛛を解き放した。

「なに、」

「本来ならば、蝶は蜘蛛に食べられてしまうものでしょうに」

「まあ、このお口は恐いことまで言うじゃないの」

解かれた腕からするりと抜け出て、蜘蛛は壁に叩き付けられた大福をそつと拾った。埃をそつと払い、大福を破って出てしまった餡を指に移してぺろりと舐める。

「狐姉様は蝶姉様から蜘蛛を盗ろうなんて思いませんよ、大福だってほらふたつ、最初から蝶姉様の分と蜘蛛の分だったのでしよう、美味しく頂かなくては罰が当たります」

「……死人が仏様みたいなことを言うのね」
「蝶姉様、」

「……嘘よ、蜘蛛が可愛いからからかっただけなのよ、」

色とりどりの帯が流れる、娼館の中で道に面していない場所の一番広い部屋を蝶が使っているのは、彼女が一番の稼ぎ手だからだ。色とりどりの帯の川、それは蝶の心のように流れてゆくだけで果てがない。死人なのは蝶もまた同じで、自分の言葉に彼女が傷付いてしまうのを見ることが、蜘蛛には哀しく胸に刺さる。

「……蜘蛛の姉様は蝶姉様だけですよ」

ひしゃげた大福を掌に載せて、茶を入れてきましようと言おうと蜘蛛は言う。

そんなもの食べないわよ、と蝶はむくれたのだけれど、すぐに玉露だったら考えを改めてあげないこともないわと付け足してくすりと微笑んだのだった。

蜘蛛・2（前書き）

続きます。

蜘蛛・2

娼館は、夜の遅い時間に灯を燈す。闇に紛れて客人達はやってくるのだ、確かに化け物を抱きに行っているのと知られては都合の悪いことも多々あるのだらう。

日が暮れかけ、西の空が淡い橙から濃い赤に変わってゆく頃、女達は化粧を始め、着物を選び出す。簪だの帯だのがないと騒ぐのは大抵いつもの事で、その間蜘蛛はブリキの小さなバケツにぞうきんを入れ、娼館の中を歩きまわるのが常になっていた。動き回っていないと、女達につかまり悪戯に化粧をされたりするからである。玄関口を入ってすぐのところにある大きな階段の手摺りをこすり、唯一人間である、この館を取り締まっている高梁の爺と顔を合わせ、裏口の扉が壊れているようだと言われた。

「上手く開かなくなっているんだがね」

見てきます、と蜘蛛はバケツを片付けて裏口に回る。取っ手の螺子が馬鹿になっでいて、緩くなり過ぎていたのを誰かが手荒に引き回したのだらう、今度は固くなり過ぎて回らなくなっていた。確かにこれでは上手く開かないだらう、と思ったが、生憎それを直す為の道具はあっても肝心の螺子がなかった。困ったな、と蜘蛛は呟く。暮れ時に開いている店などなく、明日まで放っておいても良いのだけれど時折客の途切れた合間に裏口からそつと出て一服する姉様もいる。戸が開かぬと機嫌を損ねられても困るが、それ以上に癩癩を起こして戸を壊されるのも心配で、仕方なく蜘蛛は金物を取り扱う店まで行くだけ行ってみようかと思った。

「高梁さん、ちょっと出てきます」

「おや、こんな時間から、」

「裏口は螺子がおかしくなっているようだ」

「店など閉まっているだらうに」

「はい、それでも」

行くだけはただですから、と笑って見せる蜘蛛に、高粱は氣をつけて、と声をかけた。

「薄闇は闇より恐いことがあるでね」

大丈夫ですよ、と小銭だけ握り締めて蜘蛛は出て行く。

しかし金物屋はやはりきちりと雨戸まで閉められており、仕方がないけれどそれはそれでまた明日、と蜘蛛は歸りを川に沿った道を選んだ。柳の木がいくつか植えられているその道は、昼間でも少し薄暗く女子供に不評だ。風にそよぐ柳の細い枝は幽霊のように意志を持たず誰彼をも誘うから、それが気味悪いのかも知れない。けれども蜘蛛はその道がなぜか好きだった。湿ったような匂いのするそこを歩くのは、死人である自分にはぴったりだと思っていたせいもあるかもしれない。しかし、それ以上にあまり人が通らないことも彼をまた安心させていた。人が少し、苦手なのだ。

既に酔っているのだから騒がしい男達が時折通るのを、首をすくめ、蜘蛛は歩みを遅くしてやり過ごす。そうすれば他には人に会わずに済む。それより早く帰って客用の酒を用意するのを手伝った方が良かったら、などと思っていた時だった。後ろから、やけに賑やかな足音が近付いてくるのは気付いていたのだけれど、まさかいきなり伸びてきた手に口を塞がれるとは氣配にも氣付かなかった。酔っ払いだろうと高を括っていたせいだろうか。

「なっ、」

いきなりがばりと大きな手で口を塞がれたせいで、呼吸が乱れる。もがこうとする前に腕を取られ、そのままどう転がされたのか地に伏す形になった。勢いがよかったので膝や腰骨を打つたらしい、嫌な痛みがあちこちに走る。

暗闇で痛む身体のアチコチが、いきなり今まで感じもさせなかった存在感を露わにさせ、死んでいるのに、と蜘蛛はこんな状態なのに一瞬氣を逸らしてしまった。

「こいつだこいつだ、あの化け物娼館の奴だ」

「おい、でもこれ女か？」

首をきゅつとねじり上げられるように掴まれる。くうつ、と声が漏れたが、男達は気にも止めずあつという間に胸元へ手を差し込んできた。

「いつ、いつ、」

少年の形をした蜘蛛の声は変声期前のそのように少し高い。着物の襟元から突っ込まれた手は容赦なく蜘蛛の薄桃色をした乳首を擦り上げた。

「これじゃ分からん、まだ乳が育ってないのかそれとも男なのか」

「細い首をしとるがな、どれ、脱がせてみようか」

「化け物だろう大丈夫なのか」

「大丈夫大丈夫、見世物小屋へ売ればいい金に成るだろう、娼館の者だしどれ、味見でも」

蜘蛛はその名の通り口から糸を紡ぐ事ができる。べとべととする糸を吹きかけて逃げ出してやることもできたのだが、生憎押さえつけられている為顔を真っ直ぐと男達の方へ向けることができない。

「いやつ、」

騒がれると困る、と先にひとりの男が蜘蛛の口へ手ぬぐいで猿轡を噛ませてしまった。後はただただ空気が漏れるような細かい声が抜けるだけである。

「うつ、うつつ、」

着物の帯に手をかけられたらすぐに身包み剥がされる。両腕も後ろに縛られ、なんだ男じゃないか、と投げつけられた言葉を地に転がされたまま耳が拾う。恐い、と思った。寒くもないのに肩から震えが走る。薄闇の中だから尚更だろう、輪郭のぼやける男達三人はそれでも爪先で蜘蛛の太股を軽く踏みつけた。

「女みたいな細さだったのにな」

「まあ男の方が多少の事じゃ死なないし丈夫だ、ああ、でも高く売れるのは女の方が」

太股を這い上がってくる足は蜘蛛の陰茎のあたりまで、それは丁寧に這い上がってくる。ぞぞ、と背中に、先ほどとは違う震えがき

た。くうつ、と喉が鳴る、それは逃げ出したいが為の声ではなく。

「……感じているのか」

「なに、お前何をしているんだ」

「いや、こいつなかなか楽しめそうな気がしてね」

「楽しむって、……おい、おっ勃ててやがるのか、もしかして」

口の中が乾く、それは舌が別の物体のようになり喉に張り付く錯覚を覚える。喉を塞ごうとする悪意を持った塊に思えてくる、自分の身体の一部のはずなのに。

もがこうと肩をずらして逃げる体勢を取ろうとしてもすぐに二の腕の辺りを掴まれて引き戻される。土の匂いがする。小石が当たるのだろうか、腰の少し上辺りが痛い。仰向けにされている無防備な状態で、男達の顔はよく見えず服従させられている形の蜘蛛はこれから何をされるのかを考え恐くて震えはじめた。殺されることはないだろう、売り飛ばすという話をしていたので。けれども、自分は女のように組み敷かれるのだろうか、そういった趣味を持つ客も時折は娼館へ顔を見せることもあったけれど、男は蜘蛛しかないのだし売り物でもなく、当然のように断られてきた。どれ、とひとりの男がしゃがみこんで蜘蛛の顔を覗き込む。酒臭い息だった。

「白い肌だな、でも土で汚れてる」

「いいじゃないか、別に舐めまわす訳でもあるまいし」

それもそうだ、と男は大して面白くもないのに大笑いし、蜘蛛はその気色悪い笑顔を自分に近づけたくなくけれどももがいてどうにかなるのだろうかと半分は観念しかけていた時だった。どこかで聞いたことのあるやわらかに落ち着いた声を耳にしたのは。

「その酔っ払いさん方、ちょっとやめておいたらどうでしょうかね」

助けなのだと、最初は分からなかった。仲間が来たのかとすら思ったのだけれど、その声の人は容易に蜘蛛の上に被さるうとしていた男の襟首を掴み、ぺいっと投げ捨ててしまった。

「な、なんだ貴様、」

「あ、将やんじゃないの、駄目じゃないこんな所で女の子にオイタしてちゃ、」

「お前、安坂んところの、」

安坂、という言葉聞いて、蜘蛛は涙のたまっていた目をおそるおそる開く。どうやら恐怖にすっかりと瞼を閉じてしまっていたらしい。

「おや、女の子じゃないじゃないか、この子は知ってる、ああそう、蝶のところの蜘蛛だ、お前、蜘蛛だね」

これは知り合いだよここでのことは内緒にしてあげるからさつさとお帰り、と男達を追い返してくれて、安坂は蜘蛛に手を伸ばす。思わず肌を晒された自分が恥ずかしくて顔を背けてしまったが、それには気にした様子もなく、やさしく蜘蛛を起すと着物を直し、土を払ってくれた。噛まされていた手ぬぐいも取ってくれる。

「あはは、昔母が自分にくれたことを人にしてやることがあるうとは。いやいや、さすがに猿轡はなかったけどなあ」

大丈夫かい蜘蛛、と頬の泥を払ってくれる指先があたたかい。思わず涙はそのまま零れようとする。

「おやおや、恐かったんだね、丁度お前達のところに行こうと思っていたのだけれど、……少しくらい遅れても良いだろうしね」

「あ、鰯の、安坂様が、好きな、ので、刺身を、買って、」

土をある程度払った後で、安坂は蜘蛛の肩を抱き、震えを認めるとそのまま抱き締める。

「お着物がっ、」

「あははははは、蜘蛛は可愛いな、甘酒でも買ってやろうか、その震えは寒さからか怖さからか、」

「……こわか、った、」

よしよし、と頭を撫でられて、蜘蛛は安心したような緊張したような。けれども身体どこかが硬く強ばってしまったのがゆっくりと解けていくとを感じる。一度認めてしまえば逆に新しい恐怖を

呼んで、自分の身に何が起こりそうだったのかが容易に想像できてしまい、蜘蛛の震えはなかなか止まることがなかった。

女にほど近い存在であるからといって、自分がこのような目に会おうとは。か弱い者はそれだけで罪なのだろうか、蝶や狐達は毎晩このように男達から組み伏せられているのだろうか。いくら金を貰っているからといって。

そんな事をぼんやり思いながらも、鼻が何かの匂いを拾っている。美しい女のような匂い、まるで蝶のような。

「どうした蜘蛛、まだ恐いか、何がそんなに恐いか」

薄闇で見えんが可愛い唇がきつと青ざめているだろう、とからかうような口調ではあるが、安坂の手は蜘蛛の背をやさしく撫でている。震えは小さくなっていたが止まらなかった。先程のことを思い出せば、人に触れられている事に嫌悪を覚え、安坂の身体を突き飛ばしてしまいたい衝動にも駆られるが、鼻先が拾う香りがなぜか蜘蛛の心を慰め穏やかにしていた。

震えが止まり切るまでにどれくらいの時間がかかったのだろう、気が付けばいつの間にか裸足になっていた足が土の冷たさにひどく侵されている。抱き締められた胸のあたたかさがだからこそ痛いほど認識され、恥ずかしい気がして目を上げた。顔を少し持ち上げると、安坂の視線にぶつかる。

「なに、」

「甘い、香りが」

「ああ、それは薔薇だ」

薔薇。

「口を開けてごらん」

「……口、」

それは蝶の為の土産物なのだろう、そう思ったら胸が痛んだ。安坂は蝶の客で、周りが羨ましがるほどすべての安坂は蝶のものである。蝶は安坂のものであり、それは誰から見ても明確なのに。助けてもらったせいだろうと蜘蛛は思おうとしたけれど、それは無理だっ

たようだ。

「ほら、口を開けてごらん」

「何故です、」

「いいから、ほら、」

言われたままに開けた口へ滑り込んできたのは甘い香りのするすべらかなもの。

「なに、」

「くちづけをしている気分になるだろう、それが薔薇の花びらだよ、人の舌に一番感触が近いとおれは思っているけれどね、……おや、蜘蛛はそういえばくちづけをしたことが……」

そういった行為などした事のない蜘蛛は顔を赤らめて俯き、いいえ、と消え入りそうな小さく震える声で告げる。馬鹿にされるのではないかと思った、そんな大抵の人間が経験済みであるう行為をした事がないなどと言っては。笑われるか、まだお子様なのかと哀れまれるかと思っていたのに、けれども安坂の反応は違った。それはすまないことをした、と何故か謝る。

「すまない、悪気ではなかったんだ、どれ、もう一度口を開けてごらん」

軽く唇を開くと、舌に花びらを乗せて出せと言う。その通りにすると、骨つばく太いが長さもあるため美しく見える彼の指が、そつとそれを摘み上げた。唾液が糸を引き、蜘蛛は恥ずかしさでまた頬を染める。顔を逸らそうとして、顎を掴まれた。驚いて目が安坂の瞳を覗き込む、彼はゆっくりと笑みの形を唇で作り、ひとつ瞬きをする。すると蜘蛛へ顔を近づける。

「え、」

重なってきたのは唇。蜘蛛は目を閉じること忘れて安坂のやわらかな舌が口内にするすると滑り込んでしまふのを許していた。後頭部をやさしく撫でられ、その手のあたたかさに安心に似た何かを覚える。甘い匂いがする、安坂の胸は血の通うぬくもりがある。

「戯れは、」

息継ぎの要領で唇を離し、慌てて叫んだけれども本当はもう少し彼の唇を味わっていたかったと、正直なところ蜘蛛は思っていた。できればもう一度、と望んでしまう。

「ははは、すまん、蜘蛛があまりにも可愛くて」

しかし安坂は笑い顔を作ると身体を離れた。それがひどく、蜘蛛には切ない。

「……蜘蛛をからかうのはよして下さい、蝶姉様に言って叱っていただきますよ」

「ああ、それは勘弁、蝶は怒ると恐いでな。お前を一番可愛がつて大切にしているのだから、おれがお前に悪戯したと知ったら一度や二度ぶたれるだけで済むものかどうか」

「お客様をぶつたりはしないでしよう」

「蝶のことだからやりかねん、あいつは可愛いが気性が荒くてな、あんなに綺麗な顔をしておいてから」

薄暗闇でもはつきりと分かる安坂のやさしい微笑みに蜘蛛は胸が痛むのを覚える。嫉妬はどちらに対してなのだろう、安坂なのか蝶なのか。

そうそう今のがくちづけだからね、と安坂が目細めたまま言った。しばし呆けて意味を理解するのに時間が掛かった蜘蛛は、すぐに耳まで朱に染める。

「安坂様は意地悪です……」

「ああほら、そんな泣きそうな顔をするな、可愛い顔がもつと可愛くなるではないか、もう一度してしまっぞ」

安坂のからかうような口調にどこか心をときめかせながら、蜘蛛は必死で首を横に振る。娼館へ共に行こうかと言われて、小さく頷いた。手を差し出されて、それをおそろおそろ握る。幸せな温度のある安坂の手に、体温を失くした自分の手はどんな感触なのだろうと思いつながら、蜘蛛は背の高い安坂を少し見上げ、心持ち寄り添うようにして暗い道を歩き出した。安坂の空いている手には赤い薔薇の花が三本、握りしめられている。

蜘蛛・3（前書き）

続きます。

蜘蛛・3

化け物といわれても生き返って逢いたい人がいたのよ、と狐が話している。昼間の娼館は静かで穏やかな空気が満ちている。昨夜の大騒ぎはどこへ行ってしまったのかと思うくらいだが、時折悪ふざけの客が割ってしまったお銚子の破片が残っていたり、壊してしまった襖などが夢の残骸として存在しており、すべては現実だったのだと思わせる。破られてしまった障子を直しながら、蜘蛛は狐達とやわらかな陽射しの午後、彼女の昔の話を聞いていた。

「心中したんだけどねえ、相手だけ生き残っちまって。そんならさつさと後追うか、わたしに一生涯操立てしてりゃいいものを、他の女に搔つ攫われちまって。情けなくて泣けたね、一緒に死のうって言ってた男がなんだい、女ならわたしじゃなくて良かったのかいって」

狐は機嫌がいいと昔話を始める。その時々で細部が違っていたりするのだけれどそれは愛嬌というもので、蜘蛛もいちいち口をはさんだりしない。椀に入れた糊を刷毛で掬いながら、静かに障子紙を貼っていた。

「生き返ってやったさ、馬鹿げたことにそれでもわたしはあいつを愛していたんだ、厭だねえ、どうして一度惚れると長いのかね、あれは女だけなのかい、男もそうなのかい」

「人生二度目でも分かんないことがあるんだね、姉さん」

ふくよかでどこか垢抜けない、それでも田舎臭さが売りなのだという狸が茶々を入れる。彼女は先ほどから団子を三本も食べていて口の周りにみたらしのたれが付いている。客もだからなのか似たような容姿の男ばかりがついて、色恋の話よりも土産物の饅頭の数のほうが多い。蜘蛛にもよく分けてくれるのだが、蝶には怒られる。狸のように太ったらもうあたしの弟として認めてあげないよ、と。

「うるさいね、菓子ばかり食ってる狸の脳味噌まで胃袋な頭じゃ分

かないだろうさ、わたしは蜘蛛に聞いてるんだから、どうなんだい、蜘蛛、あんたは一度惚れたら長いのかい」

曖昧に微笑んで首を傾げて見せたけれど、狐は許してくれなかった。

「ほらほら、蜘蛛、どうなんだい、わたしの男だけが特別だったのかい、一度好き合ったらそれだけで他の男も女も要らなくなるようにはならないのかね」

「……蜘蛛は、そういった、好くとか惚れるとかの感情がよく、」

分かりませんから、と言いかけて蜘蛛の手が止まる。思い出していたのは安坂の唇。花の匂いがした、あのあたたくてやわらかな「腹でも減ったか、口が重くなったよ蜘蛛さん」

「あんたじゃあるまいし蜘蛛が腹減らして言葉忘れるもんかね、なんだい、なんか楽しい話でもあるのかい、蜘蛛」

食べかけの団子を差し出そうとする狸を笑い、狐が細い目をまします細める。鼻が鋭いのか狐はそんなとこばかりをすぐに勘よく当たてしまう。多くを思い 出して赤面する前に、蜘蛛は慌てて、けれども表面上はわざとゆっくり首を振った。

「何もないですよ、狐姉様、狸姉様」

「なんだい、楽しい話のひとつも持っていないのか」

「蜘蛛はただの雑用ですから」

「なんだいなんだい、つまらない。なにひとつとしてつまらない」

「ああ、姉さん、つまらなくないよ、蝶さんが土産を買ってくるだろう、今日はそれが楽しみだ」

ぴくりと蜘蛛の耳が反応した。蝶。そういえば今朝から蝶の姿を見ていない。いつも気紛れに起きてくる人である上、今日は障子を張り替えたり遣いに出たりとばたついていたので顔を見ないことも大して気には留めていなかったのだけれど。

「……蝶姉様は、まだ寝ているのでは、」

「あれやだ、蜘蛛さん知らなんだのかい、蝶さんは朝の早くから出かけたよ」

またあんた朝っぱらからつまみ食いしてたんだろ、と呆れる狐の声も耳に入らず、蜘蛛はただただ狸の顔を見詰めていた。普段出かけたりはしない人なのだ、用事があれば蜘蛛にやらせ、それより何より蜘蛛に声もかけずに出かけるなどということは今まで一度もなかったのだ。

「……知りません、蝶姉様が朝から……」

「あんたが寝ていたからきつと黙って出たんだよ、起しちゃ可哀想と思ったんだろ」

狐が珍しく蝶を庇うような言い方をしたが、蜘蛛は心にすんと穴が開いたような気分になっていた。黙って、出かけた。蝶が。それだけでも裏切られたような気持ちなのに、狸はそんな蜘蛛に気付かずもつと心を痛めることをさらりと続ける。

「ほら、あのひとだよ、出かけるとか言っていたよ、ほらほら、あの金持ちでなかなかいい男の、あれあれ、ほら、そうそう、安坂、あのひとだよ、いいねえ私もあんな上客欲しいねえ」

「安坂様と……、」

「新しい着物も新しい帯も、欲しいとねだればすぐ買ってくれる、しかもあんないい男だもの羨ましいねえ、まったく」

「安坂様……」

ふたりが共にいるのは構わない、安坂は蝶の客であり、互いが互いを気に入っているのだから。けれどもこの置いていかれたような心細さはなんだろう、今まで知ることのなかった感情、それを蜘蛛は安坂に感じているのか蝶に感じているのか自分でも分からないまま混乱する。

「そういえば蝶さんの部屋の良い匂いがあるあの花、あれ何だい、牡丹の小さいようなやつさ、八重の桜の大きいようなやつ、強い匂いだね」

「薔薇とかいう花らしいよ、真っ赤な花だろう、安坂が持ってきたんだと。可愛がられているねえ、あんな珍しいもの、幾らくらいするんだるか」

わたしの男もそのくらいわたしの事可愛がつてくれてたらねえ、と狐が切ない表情を作る。団子を食べていた指をぺろりと舐めて、狸は次の串に手を伸ばそうとしている。穏やかな日の光はあたたかく、それなのに心が寒い気になっているのは蜘蛛だけで、端から見れば楽しそうな団欒風景なのだった。

「あれあんた、暗い顔をするでないよ」

「……え、」

刷毛で糊を何度も練るように混ぜる。空気の粒が入り、悪戯に白く濁ってゆくのをぼんやりと眺めていたら、いつの間に動いてきたのか狐につるりと頬を撫でられた。

「蝶に置いていかれたくらいで」

「そついった訳では……」

暗い顔などしていませんよ、と無理に笑ってはみたけれど、狐は納得しない顔でもう一度蜘蛛の顔をつるりと撫でただけだった。

置いて行かれたと。

口に出され頭に直接刻まれると、深い痛みが胸を刺すようだ。

『それはあたしの弟なのだから、見世物小屋になんか売ってご覧、二度と客なんか取らないからね』

蜘蛛が生き返ったのはどれくらい遠い昔の話だっただろう。普通は動物と掛け合わされるのだが、珍しく昆虫と掛け合わされた蜘蛛を見に、同じ身体を持つ蝶が興味を持ち覗きに来て、見世物小屋にやられるのだと知った途端にそう叫んだのだった。当時から売り上げの良かった蝶の二度と働かないという宣言は周りを困らせたらしく、蜘蛛は蝶の元に預けられたのだ。弟なのだから、と言われたので、蜘蛛はずっと蝶の元に居た。いつでも一緒だった。それなのに「蝶姉様は蜘蛛より安坂様が好きですから」

自嘲気味にそう言うけれど、狐や狸がそれを否定してくれればいいと、心の隅で本当は思っていた。けれども彼女達は否定しない。それどころか、そう言えば、などと言い出す。

「蝶とはもう長い間ここで一緒だけれど、安坂ほど執着されてる男

も今まで居なかったね」

「ああそうだね、蝶さんは特定の客に固執することない人だったもんね」

蜘蛛もそれは知っている。今までどんなに金を積まれようが口説かれようが、特定の客と出かけるなどということは絶対になかったのだ。蜘蛛に馬鹿にしたような口調で客の悪口を言うのが常だった、金で動く女だと思っっているのかだとか、見かけはこんなでも本当はあの男よりずっと長く生きているのに馬鹿だねえだとか。

「蜘蛛は蝶が好きかい」

狐が優しさなのか意地悪なのか判別しにくい光を瞳に宿してそう聞いた。蜘蛛は静かにひとつ頷く。

「本当に好きなのかい」

「それはどういった意味で……」

聞きかけた時に高梁がやってきたらしく、玄関先で蜘蛛の名が呼ばれた。短く大きな返事をして、蜘蛛は躊躇いがちに刷毛を持つ手を膝へ下ろす。

「行っておいで、糊が乾かないよう時折水はかけておいてあげるから」

「お願いします、」

糊の器へ刷毛を置いて、蜘蛛は立ち上がる。蝶のいない娼館はそれを意識しただけでべったりと重苦しいような、それでいてどこかいつもより多めに空気が肺へ入ってくるような、そんな気分になせられる。

自分の身体に違う生き物が入り込んで生命を維持されているのだと知り、さらにそれは化け物として生き返ったのだという事、余程の事がない限り死ぬ事はないのだと知った時、蜘蛛は娼館を逃げ出そうとした。遠い昔の話だ。蝶は我侘な自分を隠そうともせずにしたけれど、それでも蜘蛛の面倒だけはよく見ていたのでそれはそれはひどい怒り様だった。

「逃げ出して何になるというの、どこへ行くというの、もうあんたはあんたじゃあなくなっているのよ、蜘蛛と死人の掛け合わせなどと皆に知れてご覧、売り飛ばされるだけだよ見世物小屋に、ろくなもの食べさせてもらえないままいろんな処へ連れて行かれて、いつも疲れて、そんなんだよ、あんたはここに居ればいいんだよ、蝶の弟であればいいんだ」

頬を打たれたのはそれが初めてで終いだった。

我侬だけれど稼ぎは良く、金が絡まないと人付き合いが上手くできない蝶には、蜘蛛だけが何故か心を許せる唯一だったらしい。聞けば似たような年で別れた弟がいたそうだが、蜘蛛に自分の弟を重ねていたのだろう。

夜遅くになって帰ってきた蝶は、安坂を同伴させていたため誰の文句も受けなかった。機嫌良く酔っている安坂は始終笑顔のまま、迎えに出た蜘蛛の頬にまで唇を押し付けようと、蝶に睨まれていた。座敷を用意し、着替えを手伝うために蜘蛛は蝶へついてゆく。

「どこへお出掛けだったのですか」

思わず陰のある声が出て、蜘蛛は自分の声色に驚く。しかし蝶は艶やかに微笑み、黒目がちな眼で蜘蛛をちらりと眺めると、飴玉買ってきたよ、とだけ言った。

「……蝶姉様、」

「着物も帯も、新しい簪も買って貰った、安坂はいいねえ、蝶が欲しいと言う物すべて、目に映るのすべて蝶の物にしてくれようとする」

「蜘蛛は蝶姉様が出掛けたのを知りませんでした」

「蜘蛛は遣いに出ていたのだから、あたしだって出掛けるとは思っていないかったのよ、安坂が迎えにきたのよ約束があったわけじゃなく」

安坂はいいねえ、ともう一度だけ繰り返す。

「安坂は蝶が一等好きだと。そんなことを言われて嬉しいと思うのは安坂が初めてだ、なあ、蜘蛛」

「……あの方はお客様です」

「それはそうだ、蝶に金をあんなに使ってくれる、若いのに、なあ。蜘蛛も知らないだろう、蝶があんなにひとりの男を良いと言つのは」
「駄目ですよ、安坂様はお客様です」

怖い声を出すなどしたのだ、と蝶がきよとした顔をして聞いてきた。置いて行かれて寂しかったのか、とからかいを含んだ声で言われる。違いますよ、と即座に否定して、けれど蜘蛛は俯いてしまふ。その通りだからだ、今まで何をするにも一緒だった蝶から、少しずつ心惹かれ始めていた安坂から、置いて行かれてしまった自分が悲しかったからだ。

「そつえば蜘蛛、この前お前怖い目に遭つたというではないか」

「……え、」

「安坂から聞いた、宵の道を歩いていて男達に囲まれたと言つてはないか、どうしてそれを蝶に言わなかったのだ」

「それは……、あの……」

男である自分が男に囲まれたなど、どうして誰かに言えようものか。蜘蛛は下唇を噛んで、くつ、と顔を伏せる。蝶などには特に言えない、馬鹿にされることはなくても、自分が弱い者なのだと晒すのは恥だった。

「安坂から聞いて驚いた、無事で良かったけれど、蜘蛛に何かあったらあたしはどうすればいいのか分からなくなるよ」

「どうせ死にません、それに蜘蛛に何かあっても蝶姉様には安坂様がいらつしやいますでしょう」

「……なんだ蜘蛛、お前妬いているのか」

「何にですか」

即座に聞き返したのはその通りだからなのだった。蜘蛛は自分が子供のようだと悲しくなる。誰に対してなのかは分からなくとも、とにかく自分が妬いているのはよく分かっているのだ、そしてそれをどうしていいのか蜘蛛自身には分からない。

「今度はちゃんと出掛けるのなら蜘蛛に言つ。それで良いだろう、」

さて、酒持って安坂ん所へ行こうかね」

からりと笑って蝶は蜘蛛に手伝わせて締めた帯をぽんと叩く。美しい赤色をしたそれはいつかの薔薇の花びらのようだ。くちづけを思い出して蜘蛛は唇にそつと指先で触れてみた。安坂の唇は、少なくとも今夜だけは蝶のものになることを考えながら。

蜘蛛・4（前書き）

あとちよつと続きます。

蜘蛛・4

薔薇が匂う。蝶の部屋からだ、それは安坂が来る夜の度に増えてゆく。

鯨の刺身を買に行かされることが増えた。

確かに蝶はどこへ行くにも蜘蛛に告げてから出掛けるようにはなかったが、やけに頻繁に安坂と外へ出るようになった。ずっと夜の中でしか生きてこなかったので、時折彼女は体調を崩して帰ってくる。日の光に当たり過ぎていいるのだ、死人が太陽の下に居ること自体が間違っている気もしたけれど、蜘蛛は何も言えなかった。今日も具合を悪くして帰ってきて、床に就いている。冷たい水で絞った手拭いを額に乗せ、目覚めたら薬を飲ませようと蜘蛛は湯を冷ましていた。どうせはしゃいで歩き過ぎたのだ。自分が人ではないのを忘れ、日の光を浴び過ぎたのだ。蝶の頬に触れると、思っていた以上に熱かった。ひどい病気ではなくなったあの熱だといいいのだけれど、と蜘蛛は蝶の額の手拭いをまた水に晒す。

今夜は座敷に出られないだろう。安坂が今夜の分も金を出すとしても、蜘蛛は腑に落ちない気分になる。近頃ますますべったりなのだ、そのことが蜘蛛を苛立たせる。

「……安坂、」

手拭いを額へ乗せようとしたところで、蝶がうつすらと目を開けた。その唇から零れた名が自分のものではなかったことへの動揺を隠し、蜘蛛は静かに蝶の耳へ顔を寄せる。

「蝶姉様、お加減は」

「……蜘蛛か、安坂はどこへ、」

「座敷で狐姉様達がお相手をしているかと、」

狐姉様、の名で蝶はがばりと起き上がる。熱を持っていたせいで紅色をしていた顔が、音もなく真っ白になった。

「急に起き上がられては」

慌てて手を差し伸べるが、蝶はそれを振り払う。

「あたし以外に安坂の相手をさせるなどと」

「蝶姉様」

「安坂は」

「その前にお薬を、」

「うるさい、もう治った」

「そんな、子供のようなことを、」

安坂、と蝶が大きな声を出す。まるで蜘蛛が苛めでもしているかのように。

「蝶姉様、」

「安坂を、安坂を呼んで、」

「あの方はお客様です、蝶姉様、どうしてもあの方ばかりに固執されるのですか」

好いているからよ、ときっぱりした声で蝶がそれに答えた。今まで誰に対しても使われなかったその言葉が、蜘蛛に突き刺さる。

「あたしが安坂を好いているからよ」

「それは一時の戯れでは」

「違う、安坂も言ってくれている、なあ、あたしが安坂と夫婦になるといったら可笑的いか」

「蝶姉様、それは許されません」

「どうしてだ、あたしが化け物だからか、死人であるからか、それでも安坂は良いと言うぞ」

「熱があるのです、どうか静かに寝ていらして下さいませ、ほら、お顔が真っ白に、」

安坂、と蝶が切なげに熱のある声で彼の名を呼ぶ。蜘蛛などまるでそこには存在しないかのように。蜘蛛など、あんなに弟として可愛がった者すら目に入らないかのように。

「蝶姉様……」

騒いでいたので声が届いてしまったのだろう、襖が突然開かれ、ひよっこりと安坂が顔を覗かせた。廊下を歩く音など聞えなかった

のに、と蜘蛛が首を傾げるより前に、蝶が入って来た安坂に飛びついた。

「安坂、」

「なんとまあ騒がしい子だろうね、蝶は。ほら、蜘蛛が驚いて目を丸くしているよ、ほら、ほら、少し待ちなさい、いい子だから」

「あたし以外の座敷を取るな、狐と遊ぶな、蝶だけ見ていれば良いのだ安坂は」

「まるで駄々っ子だ、おや、身体が熱いじゃないか、お医者様を呼ぼうか」

「厭だ、安坂が居れば良い、ここに居れば良い」

いやいやと首を振る度に呼吸が荒くなる。蝶の熱がさらに上がりはじめているのは誰の目からも確かで、安坂は軽く蜘蛛へ向って肩を竦めてみせた。

「いつもこんなだったかな」

「いいえ、……いいえ、熱のせいかと」

そうだなあ、と安坂は蝶を抱き付かせたままやわらかく笑い、では傍に居るから蝶は寝ていなさい、と彼女を促す。

「本当、本当に傍に居るのだな」

「居る、約束する、大丈夫」

すると大人しく蒲団へ戻り、蝶は白く小さな手だけをそっと出した。

「手を」

「はいはい」

安坂が枕元へ座り込み、その手を握り締めてやるとようやく安心したように蝶は目を閉じる。すみません、とその隣で蜘蛛が頭を下げた。いや、と安坂が首を振りまた目を細める。

「この可愛らしい人はどうしてこうなのかね」

返事に困り蜘蛛が黙っていると、安坂はさして気にした様子もなくただ空いている方の手で蝶の髪を撫でた。蝶はもう寝息を立てはじめている。本当は起き上がるのも辛かったのかもしれない。

「おれは蝶が可愛くて仕方ないよ」

「はい、」

「ここから攫い出したいんだよ」

「……え、」

それ以上は何も言わず、安坂は愛しげに蝶の髪を撫で続けるだけだった。蜘蛛は胸の深い場所から何とも形容し難い、泥のように重たいものが膨れ上がるのを感じる。求め合っても、どれだけ同じ強さで求め合っても惹かれあっても、所詮は人間と昔人間だった者だ。安坂よりずっと長く蝶は生きるだろう、年を取り皺も増え、死に近づきながら生きていくような状態に安坂がなる頃でも、蝶は今のまま何ひとつとして変わらず艶やかに微笑み続けているだろう。それでは駄目なのだ、今は良くて、その時駄目になってしまうのだ。先のことばかり心配して動かないまままでいたら意味がないと蝶なら言うだろう。けれども、このまま居ればずっとこのまま平穏な日々が続く、それだけは分かっているのだから、どうなるか分からない場所へ出て行くことはないと思うのだ。

いや、と蜘蛛は首を振る。

それは詭弁だ、本当は自分が置いて行かれないだけなのだ。蝶からも、安坂からも。ここにひとりにされるのが厭なのだ、蝶に対する好意と安坂に対する好意が別の種のものであると知っていても「……蜘蛛がもしも、もしも望んだのなら、安坂様は蜘蛛を抱いてくれますでしょうか」

唐突な問いかけは、蜘蛛の中にずっとあったものだ。安坂が驚いた顔になる。ここで自分の望む返答をしてくれたなら、と蜘蛛は胸の内で祈っていた。ただひとつ、頷いてくれさえすれば。

「恐い目に逢ったばかりなのだから、冗談でもいけないよ、そんなことを言うもんじゃない」

もう元の笑みを戻して安坂がやわらかに言う。

はぐらかされたのだと、蜘蛛は頬を染めた。安坂を蝶と半分ずつにする事ができたのなら、もしくは蝶を安坂と半分ずつにする事が

できたのなら、置いて行かれずとも済むような気がしていた蜘蛛は、それを否定された気分になっていた。

「……そうですね、つまらない戯言でした、」

蝶姉様が起きたら飲ませますので、と蜘蛛は湯を取りに行くと立ち上がった。

「安坂様にも何かお飲み物を、」

顔を見ないようにして襖を開ける。背を突かれたように部屋を飛び出し、蜘蛛は後手に襖を閉めた。

このままひとりで取り残されるのではないかと、蜘蛛は怖くなっていた。ひとりになること自体は怖くない、ここには狐も狸も高梁も、皆気心の知れた者達がいるのだから。

けれども、蝶と安坂から置いていかれるのはどうしても厭なのだった。

蜘蛛は考える、どうしたら三人で居られるのかを。もしかしたら自分だけが邪魔者なのではないか、ふたりにとって自分が何もしいことがただそれだけで幸せなのではないかとは気づかない振りをしながら。三人で居たいのは蜘蛛だけなのだ、それでも。

「厭だ……」

置いて行かれてしまうのは。どうすればいいのかと、蜘蛛はずっと考えていた。三人で、ずっと一緒に居られるように。蜘蛛を置いて、ふたりがふたりだけでどこまでも好き合ってしまったないように。

夫婦になろうと、と蝶が幸せそうな弾む声で告げたのは、よく晴れた日の午後だった。買って貰ったという新しい帯を広げた脇で、珍しく茶を飲みたいと蝶が自分から言い出した。

「饅頭も食べたい」

「珍しい、蝶姉様がそんな事を言い出すと空模様が荒れます」

熱を出し、蜘蛛と安坂に迷惑をかけた日のことを、蝶はあまり良く覚えていなかったようだ。結局風邪を引いていて、あの後しばらく

く寝込んだ。病気の時の蝶は大人しく、起き上がっても果物を食べるのが精一杯で、細い身体が益々薄くなってしまうてはいたけれども、それでも熱が下がり、見舞いに来る安坂とも話ができるようになったと、楽しそうに一日よく笑っていたりした。

熱も下がり調子が戻ってきたその日は特に機嫌が良く、口調も穏やかで肌の色も美しい薄桃色をしていた。

「安坂が、ここを出ようと」

「……え、」

「蝶を嫁にしてくれるんだと、なあ、どうしよう蜘蛛」

茶をいれ、戻ってきた蜘蛛に蝶は嬉しそうに口を開いた。蜘蛛の持っていた盆が揺れる。

「ああ、茶が零れる、蜘蛛、どうしたんだい」

「安坂様が……」

「うん、ああ、蝶にそう言った、蝶は安坂が大好きだ、なあ、蝶が人の嫁になると」

どうしようなあ、とまた繰り返すも、それは祝って欲しい心が戸惑ったように言わせているだけなのがすぐに分かる。真つ赤な唇が幸せそうに笑みの形を作っている。

「……無理です、蝶姉様、」

「なに、何か言ったかい、蜘蛛」

盆から自分で湯飲みを取り、蝶はぺたりと座り込んで微笑んでいる。饅頭食べたら狸みたいになるだろうかと、自分で言って笑う。声は届かず、蜘蛛は無視された気になった、それは彼をひどく憤らせた。

「蝶姉様は蜘蛛を捨てるのですか」

「……どうした、蜘蛛を捨てるとは……そんなことはないだろう、蜘蛛はここに居る場所があるではないか、どうした蜘蛛、そんな怖い顔を、」

「安坂様は蜘蛛にもくちづけました、蜘蛛にも可愛いと、」
叫んだのに蝶はふわりと笑っただけだった。春の花が日差しの中

でやわらかく花びらをほどいてゆくように。

「安坂に蝶を取られるのが寂しいのか」

「違うっ、」

上手く言えない自分にも腹を立て、首を振る蜘蛛へ蝶は手を伸ばす。何を、と目だけで蝶を捉えたが、予想外の動きにそのまま蜘蛛は止まってしまった。押さえられたのは手首、重ねられたのは甘い香りのする唇。

「ほうら、これで一緒、」

か、と頭に血が上った。馬鹿にされているように気がした、あしらい易い子供だと思われているのだと。蜘蛛は怒りに任せて本能を爆発させていた。獲物を捕らえる虫のように。『蝶』が『蜘蛛』に捕食されるのは自然の通りなのだ。

「蜘蛛、」

蝶の驚いた声があがる。

蜘蛛は耳を貸さず、糸を吐いた。蝶の前では、いや、誰かの前では絶対にしたことがなかった行為だった、化け物だと自ら認めることになる上、元々糸を吐くことになる事態がなかったからだ。

足場用の糸ではない獲物を捕らえるための糸が粘り気を持ち蝶に襲い掛かる。悲鳴をあげて逃げ出そうとする蝶は、けれどもまだ最後まで蜘蛛の戯れなのだと信じている光を瞳に宿していた。

「蜘蛛、」

白い糸で蝶の身体が着物ごとぐるりと囲われる。まるで蛹に戻ってしまったかのように。首から上だけが糸を絡めずにおり、蜘蛛は蝶の唇を手で覆うと耳元で囁いた。

「蜘蛛はずっと蝶姉様と一緒にいいのです、」

首筋に唇を這わせる。牙をむく。

蝶が慌てて蜘蛛の指を噛んだが、蜘蛛はその痛みを少しも感じなかった。そのまま蝶の首へと牙を立てる。

「きい、」

悲鳴なのか叫びなのか、分からない声をひとつ立てると蝶は目を

見開いた。口の中へ溢れてくる血に、蜘蛛はむせ返りそうになりながらもそれを甘いとを感じる。

花の匂いがする。

薔薇の花の匂いだ。

安坂が蝶へ贈ったあの赤い花、蝶の血はあの花びらに良く似ているのだろうか。

どれぐらい蝶の血を啜っていたのだろう、ふと手の中の蝶が軽くなるのを感じて、蜘蛛は口を離す。血が、胸元をべったりと染め、零れていたのだろうそれは置をも染めて甘い香りを放っていた。

「蝶姉様はもう蜘蛛の中……」

真っ赤に濡れた唇で蜘蛛が笑む。どこかその顔は蝶を思わせる。

「蝶姉様はもう……」

唄うように繰り返し、蜘蛛はふわりと笑い続けた。

日差しはまだ明るく、部屋の中を、血で染まる蝶だったものも蜘蛛も、すべてをやわらかく包み込んでいる。

蜘蛛・5（前書き）

蜘蛛、これで最終話です。

お付き合いましたき、ありがとうございました。

蜘蛛・5

白粉を叩く、首筋までしつかりと。紅を引く、真つ赤な花のように。

着付けは分かっていた、何度も蝶のそれを手伝ったのだから。

廊下をぱたぱたと歩きまわる音がする、日が暮れたのでそろそろ女達は夜の支度に入り始めるのだ。着る物を用意したり、あるいは飯を済ませたり。髪を梳いたり、湯を浴びたり。どこかで蜘蛛を呼ぶ声がしたが、蜘蛛は耳を貸さずに紅筆で紅を掬っていた。髪が短いのは仕方がないが、化粧をすれば蜘蛛の細い目も薄い唇もそれはそれで逆に元が無いため妙に色っぽく変化する。蝶の血を啜ったせいなのか、今までとは違う、艶やかな空気を纏い、蜘蛛は鏡の前に膝を崩して座っていた。

日の出ている頃までは蝶だった、今では蜘蛛の糸にぐるぐると巻き付けられている死体は蒲団で巻き込んで押し入れに詰め込んである。いくら紅を引いても上手くいかないような気がして、蜘蛛はもそもそと何度も塗り直す。

「これでは違う……」

鏡に映る自分の顔が蝶のそれに重なる。蝶の唇はもつとぽつてりと厚く、誰をもが誘われてしまうそんな唇だったのに。

「上手くいかない……」

ひとつため息を吐き、蜘蛛は前髪をかきあげた。やわらかく細い髪が指先に絡まる。

「これでは安坂様を……」

口にした名にゆるとひとりで首を振った。蝶ほどでなくとも良い、けれども美しくならなくてはならない。

蜘蛛、蜘蛛はどこだい、とまた声がする。狐の声だった、また戸口でも壊れたのかもしれない、猫が研ぎたいと柱に爪を立てたのかもしれない。蜘蛛は返事をしなかった。ここにいるのは蜘蛛であり、

蜘蛛でないもの。蜘蛛にもそれがよく分かっていた、もう自分が自分ではないのだと。

蝶を、殺した。

時間をかけて瞬きをしながら、蜘蛛は鏡の中の自分へ目をやる。

蝶を殺した、蜘蛛は『蜘蛛』として、蝶を『蝶』として捕食した。

「いいえ、ひとりにはさせません、蝶姉様、」

胃の辺りをそつと押さえる、蜘蛛の手はいつもより妙に白い。鰯の刺身を買っておいで、と鏡に向かって言ってみた。

「『安坂が好きという、ほら、買って置いてくれないかい』」

蝶の口調を真似ると驚くほど似ていた。もうふたりでひとりなのだ。蜘蛛は着物の袖で唇の端を押さえると、くくく、と笑う。

「蝶、」

部屋の外で声がした。

「……『なにさ』」

「蜘蛛を知らないかい、」

「『知らないよ、また誰かの遣いでどこかへ出ているんじゃないのかい』」

「出掛けるんならいいけれど、蝶、あんた声がおかしいのか」

「『……この前の熱のせいだよ、まだ治らない、』」

「……蜘蛛、蜘蛛だろう。あんたわたしをからかって遊んでいるね、その声は蜘蛛だろう、ちょっと、ここ開けるよ」

「『開けるな、』」

「なに遊んでいるんだい、蜘蛛、蝶は」

「開けないで、」

慌てて言っただけでも戯れたと思っている狐は何の悪気もなく襖を開けた。銀の刺繍の牡丹の花。

「……蜘蛛、」

狐の細い目が驚きに見開かれる。

「何をしているんだい……」

狐の目に入ったのは、白粉で真っ白な顔になり、唇だけがやたら

と赤く染まっている、蝶の着物を身に着けて鏡台の前で座り込んでいる蜘蛛の姿だった。その顔の異様さに狐は目を疑う。あの穏やかな幼さの残る蜘蛛の顔ではない。幾人もの男を知った蝶の顔、まるでこちらの方に良く似ていた。

「蝶は……」

「開けては駄目と言ったのに、狐姉様」

蝶の簪を指先で弄びながら、蜘蛛がゆっくり狐の方を向く。狐は部屋の中に漂う、生臭いような鉄錆のような匂いに眉を寄せていたふと、目が部屋の中央ら辺で止まる。何かを零したような染み、黒に近い赤の、乾いた形容しにくい色。

「蜘蛛、蝶は……」

「そつだ、狐姉様は蜘蛛に何の用かい」

口調がまるきり蝶で、狐は寄せた眉をますます寄せる。背に厭な感触がぞわりと走った。

「蝶は、」

「狐姉様、姉様は蜘蛛を探していたのでは」

「ああ、ああ、蝶の姿がなくてね、あんたなら知っているかと……。安坂から遣いが来て、蝶と会はずだったのに姿を見せなかったと」

「安坂様が」

「……蜘蛛、それはなんの悪戯だい」

「悪戯」

何のことでしょうと蜘蛛が首を傾げる。唇は微笑んだままだ、それは人形のように張り付いた笑みで狐は蜘蛛から目が離せなくなつた。視界に入れたくないのに、恐怖が興味となり引き付けられてしまふ。

「あんた、蝶を知らないかい、」

「蝶姉様ならほら、ここに」

蜘蛛が自分の腹を撫でる。先ほどよりますます目を見開いて、狐が短く声をあげた。戯れなのだと笑えなかった、蜘蛛のうつとりと細められた目は狂ったように光を持ち、けれどもけして嘘は混じっ

ていないと知れたからだ。

「蜘蛛……」

「安坂様も食ってあげるの、蜘蛛はやさしいでしょう、これで三人一緒に幸せになれるでしょう」

「あんた……」

「これで蜘蛛は置いていかれないですむじゃあないの、良かった、本当に良かった」

「蝶を……殺したのかい、」

「知らず知らずに身体から力が抜けていたらしい。狐はへたりとその場に座り込んでしまった。蜘蛛が、あの可愛かった蜘蛛が。」

「あんた、それでは本物の化け物だよ……」

「化け物、死人であるのは狐姉様も同じでしょう」

「にこりと微笑み続ける蜘蛛の、真っ白な顔がよく知ったものなのにな、まったく知らないもののように見えてそれが怖い。」

「ねえ、狐姉様、蜘蛛は可愛いだろうか」

「なにを、」

「蝶姉様と同じほど、安坂様は蜘蛛を愛してくれるだろうか」

「うふふ、うふふふふ、と蜘蛛が笑う。壊れてしまった者の目をしていて、それが狐をひどく怯えさせた。しかしどうにか襖を掴んで起き上がり、狐は一步、蜘蛛の方へ近付く。」

「蜘蛛、」

手を差し伸べると、蜘蛛は無邪気な顔で狐を見る。抱き締めれば元の蜘蛛に戻るのではないかと思われるほどの無垢な顔で。恐々伸ばした指先で、つるりと蜘蛛の頬を撫でた。

「蜘蛛、お前が今日から蝶の代わりになるかい、」

「蝶姉様の代わりなどおりませんでしょう、蜘蛛の望みはそんなものではない、蜘蛛は安坂様の血を啜りたい」

「何故、」

「そうすればこの身体の中で三人一緒に居られます、そうでしょう、それが一番幸せでしょう」

「……それは駄目だ、蜘蛛、そんな事を繰り返してご覧、お前は本物の化け物になるよ」

ぱし、と狐の手が払い除けられる。痛みに驚いて小さく狐は声をあげた。蜘蛛の眉が、き、と釣り上がる。本能で尻尾が膨らんだ。敵意を感じる、危険を感じる、狐の背がぞわりと逆毛立つ。

「蜘蛛つ、」

「いけないのは蝶姉様と安坂様だ、蜘蛛を置いて行こうとした、」
零れたのは涙。

ゆるゆると瞳を揺らし、大粒のそれは蜘蛛の頬を濡らす。
涙を零したのにも気付かない様子で、蜘蛛は狐を振り払った。

「駄目だ、蜘蛛、駄目だ、」

部屋を出て行こうとする蜘蛛の足に縋り付き、狐が叫ぶ。

「駄目、誰か、誰か蜘蛛を止めて、誰か、」

既に時間となっていたらしい、ちらほらと見える客達が何事かと顔を出し、女達も狐の切羽詰まった声に驚いて声を出し合う。

「安坂が来る前に蜘蛛を止めて、」

「離せ、離せえ、狐姉様、その手を、」

ずるり、と引きずられて蜘蛛が畳の上へ転げる。空いている足で狐の手といわず肩といわずを蹴ったが、狐の力は思っていた以上に強かった。それでも。

「おや、今日はなにやら賑やかないな、」

階下で蜘蛛の待ち望んでいた声がしてしまった。安坂だ、と狐が絶望のため息を漏らす。

「安坂様、」

蜘蛛に信じられない力が漲ったのは、その声のせいだった。狐を振りほどき、転げるように蜘蛛は階段まで来ると駆け下りるのももどかしく飛び降りる。

「逃げて、逃げて安坂、」

狐が渾身の声を振り絞って叫んだ。蜘蛛はうっとりとした表情で安坂まで駆け寄ろうとする。

「安坂様、」

愛しています、と続いた気がしたが、それは誰の耳に届いたのか
まるで分からなかった。蝶姉様と安坂様と蜘蛛と。これでもう離れ
なくて済むのだと、蜘蛛は誰に対しても嫉妬をしなくて済むのだと
どこか自分で安心していた。

「逃げて、安坂、蜘蛛から離れて、」

狐の祈るような叫びももう届かない。

驚き立ち尽くす安坂の元へ。

蜘蛛が、糸を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8642s/>

蜘蛛

2011年5月7日09時10分発行